

イヤエ ソレソレ アーレハシタ 今日はこれぎりエーヨーヤーでやむる場よ  
どなた様でもやめます ソレ ヤノヤーツサ コレマカセ ホーマカセ

サンヨーイ、サンヨーイ、ヨヨイのヨイ(三回繰返す)

## 五 俚 諺

「一富士二鷹三茄子」といえば吉夢として全国的に知られている。このように日本では昔から全国津  
津浦々に至るまでいろいろな俚諺がある。今日までわかっている日本の俚諺では東北地方一帯が多く、  
東九州が少ないそうである。俚諺というのは「ことわざ」のことで昔からいいならわした言葉のことで  
ある。短い文章の表現の中に深い意味を持たせ、覚え易いように面白く工夫され、昔からずっといい伝  
えられて現在に至っているが、科学文明に押されて次第に忘れられているようである。しかしその俚諺  
の中には長い人生経験から生まれた科学的なもの、教訓的なものから占いか迷信的なもので種々雑多  
であるが、その俚諺の中には毎日の生活の拠り所となるものも多く、長い人生の厳しさから生まれた文  
化遺産として捨て難いものもある。大和町は昔から農業を中心にした経済生活を営んでおり、その農業  
は天候に影響されることが極めて多く、毎日のあいさつでも「今日はよか天気なんだあ」とか「ほんに  
むうらしかのまい」といい交わされるように、先ず天気を気にしているようである。事実天候の如何に

よって豊作になったり凶作になったりするので当然のことであり、したがって天候に関する俚諺も多い  
わけである。そしてこの天候に関する俚諺は現在の科学的な天気予報の面からも正しいと立証されるも  
のが多く現在でも通用するといわれている。以下一部を掲げるがその科学的解説は早水逸雲・吉村寿一  
氏共著の「佐賀県の気象と天気」によるものである。

### 1 天候に関するもの

#### ● 北風と賃取りは日のうち

冬の季節風は大陸高気圧の張り出しによって吹き続くもの  
で、九州では主に北西の風向きになるが、等圧線の形や地形  
によっては北風の所もあれば西風になる所もある。この風は  
日の出後に吹き始め、日没に止むのが普通だから、日雇賃取  
の日中労働者と似ているということであろう。

#### ● 冬の南風は雨

南風は所によって「はい」、「はえ」といい、福岡、熊本、佐賀  
県では「はやのかぜ」、「はやんかぜ」という。冬季天気は安  
定するのは、大陸高気圧が張り出して日本全土を包むため、  
一般に北西寄りの風になるが、南風になるのは冬型の気圧配  
置が崩れて、九州付近を低気圧が通過する時だから、寒さが  
ゆるんで早晚雨になるとみてよいということである。

#### ● いぬい(戌亥又は乾)の風は晴

いぬいは北西の方向で、この辺では天山からの吹きおろしに  
なる。北西風は晩秋から春先までの主風で、一年を通じて好  
天の時である。冬の北西風は冷たい空っ風だから、かぜひき

や火事に用心する風である。この風向きは夏や秋なら台風の  
通過後に吹きつり、春先なら春雷の後に吹き出す突風の方  
向になる。とにかく低気圧や寒冷前線の通過後か高気圧の前  
面で吹き出すので、天気回復の常風ともいえるだろう。

#### ● 線香の煙がまつすぐ上れば晴

煙がまつすぐ上るのは高気圧内での静かな晴れた日である。  
煙のなびき具合で風向きがわかるので、季節によっては天気  
予知も可能になろう。

#### ● 北ごち三月

「ごち」は東風、北ごちは北東風のこと、天気が次第に崩  
れる時に吹き易く、この句は松梅地区辺りにいわれるもので、  
北東の風なら三月も同じような天気が続き易いという意味だ  
ろうか。

#### ● 貝殻雲は長しけのもと

雲の呼び名は今日の気象観測では十種に限られているが、昔  
の分類では山雲、水雲、ひでり雲、雨雲の区別が代表的なも  
ので、水雲はうろこ型、波状、まだら状、乳房状などがある

が、早晚雨を降らすことが多く、貝殻雲もこの一種と思われる。

### ● 黄雲・低雲雨となる

古説によれば雲は水気であり、日光の影響で様々な色を見せる。又雲には五色があり、相混つてあるいは赤く又黒く、又は青く白く、黄色いのは「天威の雲」といって、雷電が起るといわれている。黄雲は低気圧内にできた片乱雲が、日を受けて黄色を帯びたものと思えば雨の兆となるのは当然であろう。又、暗雲低く垂れ込めるのは、低気圧の中心域にある証拠で、雨となることは明白である。

### ● 天山の上がすけて見えれば晴

天気は西から東へ変わると同時に、上層から下層の方へも移っていくものである。山に雲がかかるとは、山の気流が乱れてきた証拠で、風もやがて平地にやってくることであろう。もっとも低気圧の動きと対照したら北較的的確な予知になるが、雲の様子だけでは的中率は低いといわれている。

### ● 上り雲は雨、下り雲は晴

上り雲というのは北の方へ行く雲で、南風だから主に低気圧が九州の西方から日本海へ入る時で天気が悪く、南の方へ行く下り雲の時は北風になるので、日本海の高気圧が南へ広がる時で、大体天気は良いといえるだろう。

### ● 天山鉢巻 多良頭巾

山頂付近の笠雲は頭巾雲とも呼び、山腹の帯のようにかかる横雲を「山かつら」、山すそを取り巻く雲を「かいまき雲」という。いずれも山に吹きつける気流によってできるが、この

気流の乱れは地上において風や雲になり、時によっては地上までおらないこともある。

### ● 夜止んだ雨とこぜの袋落しは日の中に立帰る

「こぜ」はこじきのこと。「夜明かり天気は長持ちせぬ」と同じ意味で各地共通の諺である。同じ低気圧内でも雨雲に切れ間があれば一時天気が良くなることもある。「ながせの夕晴れ」といって梅雨時に一時晴れて又降り出すことがある。天気にくせがつくと、このような現象が繰返されるものである。

### ● 朝曇りは女の心で見える間に晴れる

「夏の朝曇りははげ頭が泣く」と同類。朝曇りは夏や秋に多い。高気圧の域内にある時だから、一時曇ってもすぐ晴れることが多い。女の不機嫌は何かのはずみですぐ直るというが、この朝曇りに似たようなもので、真夏の朝曇りは日照り続きの時はいかにも涼しいものである。けれども晴れたあとの暑さは反動的にきびしく、じかに日射しを受けるはげ頭には辛いだろう。

### ● 春秋彼岸七日中は曇れども雨降らず

例年彼岸のうちは曇りがちの日が多いようである。気圧配置を見ても、この頃は高気圧帯におおわれてうす曇りの日が多く、低気圧も容易に接近しないもので、降っても一時の小雨ですむことが多いようである。この時期は春日和や秋晴れの気候に落着く気候の変換期に当たっているようである。

### ● 夜明けのばらばら大干ばつ

「朝雨は女の腕まくり」とか「朝ばらばら夕かんかん」と同じように、急速な天気回復を表現したものである。

### ● 雨降りに北風がひどく吹けば雨止まず

高気圧が日本をおおって動かない時は、低気圧や前線が九州地方に停滞するため、北九州では北寄りの風がやや強く吹いて陰鬱な空模様となり、天気は容易に回復しないことが時々ある。とにかく気圧配置による天気の型を示したものでしょうか。

### ● 稲の葉に露多い時は晴

「秋露しげし」といわれ、露の量は一年中で秋が一番多い。「朝露は雨、夕露は晴」という地方もあるが、高気圧の中心域で天気が絶頂になった時朝露なら消失も早く、天気も下り坂になるのが普通であらう。

### ● 深霜に日和確かや神無月

神無月は旧暦の十月、諸国の神々が出雲（いずも）の国に集まる月というが、実際は神嘗月（かんなめづき）と唱え、穀物を神に捧げる月という。今の十一月で佐賀ではそろそろ霜がおり始める。この頃は高気圧におおわれて好天気が続き、夜間は地面の冷却のため霜がひどくおきる。でも「大霜は雨のもと」といって一兩日後に雨になることもあり、これを「霜あげ」というが、この句は高気圧内で安定した天気型を指している。

### ● 霜の早解けは雨

「霜の早消え雨具忘れるな」と同類。これは各地で言われることわざである。霜がおりるのは高気圧内にはいった時で、高気圧の後面になると気温も急に昇り、前面の時に比べて急に暖かくなるから霜の消え方も早くなる。高気圧の後面では

### ● 霜が全くおらないと雨

これは霜の有無によって晴雨を予知している。冬、霜がおらない時は珍らしく暖かい日だから気圧の谷が低気圧域内に入った場合に多いので天気も変わり易いわけである。

### ● 朝雷聞いて旅するな

「朝雷は隣まででも行くな」、「朝雷に川越すな」という所もあるが、春秋の雷は夏の熱雷と違って低気圧や不連続線の通過の時に発生するので、朝方や夜間でも起こり、雨は長降りして時には大雨にもなりかねないのである。

### ● 上妻夕立音ばかり

「いぬいの夕立と伯母ごのぼた餅」、「上妻夕立と親の五十年忌はめつたにこぬ」ともいう。いぬいは「乾」で北西の方角。上妻は佐賀市の東方約三十キロ、八女市の方角にある地名で、佐賀の北西あるいは東部に発生した雷はめつたに来ないというところであらう。夏の気流は南西から北東へ向って流れているので、雨雲もこの気流に乗って北東の福岡県内へ移動するのが普通だから、音ばかりで、夕立が来そうに見えて来ないわけである。

### ● 夏の夕焼け川越すな

「夏の夕焼けあぜを切れ」ともいう。雨になって増水するから危険だという警告だろうか。夕焼けが晴天を予告すること

は日本各地で言い伝えられている。夕焼けの現われるのは、西の空が晴れて雲のないことを示している。天気は西から変わるという法則からみると、晴兆が正しいが、春夏は逆になる場合がよくある。これは前線が東西に横たわる晩春や梅雨期の天気は南北に移り変わるの、西空の夕焼けもあてにはならないこともある。佐賀で二年間に見た夏の夕焼けは二十三日あつたが、その約七割は晴率を示しているの、この句の雨兆は特別の場合を指したものでらうか。

### ● 秋の夕焼け宵に鎌とげ

「秋の朝紅隣りへ行くな」と同類。夕焼けは西の空が晴れていることを示すものであるが、西の空が曇っていたら天気東遷の理により、翌日の天気は良いわけである。朝紅は逆に東の空が晴れていることだが、西の空が曇っていたら天気は悪くなることとみていいだろう。秋の天気は「女心と秋の空」といわれるように変わり易いもの。試みに昭和二十四年の秋の三箇月を調べて見たら、その的中率は四十二回の夕焼けの七十一%が晴で、後半の方が大きいということである。

### ● 朝焼けの白くなれば晴、黄は風、黒は雨

朝焼けは一般に雨兆である。佐賀での降雨率は夏秋とも七割を示し、秋の降雨率は八割で、後半は六割に落ちるそうである。気象の専門書でも、朝夕焼けの色は、天気に密接な関係があるといい、その色合いによって予想が出来ると述べている。朝焼けは美しい紅色なら雨、色が鮮明でない時は晴といっている。朝夕焼けは太陽の光線が、空気分子や細塵のため散乱されて起こる現象で、気流が乱れて細塵が多くなれば色合いは濃くなるものである。

### ● 月に雨暈日に日暈

暈が出るのは巻層雲という上層雲のためである。この雲は低気圧の前駆をするもので、暈は低気圧の接近の予告することになる。暈というのは、太陽や月の周りにできる円い光りの輪のことである。

以上、天候に関する俚諺のうち比較的科学的な裏付けのあるものについてあげてきたが、この外自然に住む動物は靈感があるのか本能なのか、こうした天気に鋭敏なのか、あるいは我々人間が人体に感じることから天候に関する予知みたいな俚諺も相当多い。以下その一部を掲げておく。

- 烏がからす高い所に巢を作る時は大水がある。
- 勝鳥かちからすが巢を低く作る時は暴風がある。
- とんびが空高く舞えば晴
- 猫ねこが耳越しに頭をなでると雨
- つばめが低く飛ぶと雨
- 鶏にわとりの小屋入りが遅れる時は雨
- 雨蛙あまがえるが鳴く時は雨

### ● 雀すずめの水浴びは天気があがる

### ● 蛇へびの木登りは大雨の兆

### ● 魚が水面に浮かぶ時は雨の兆

### ● 申西さるとしの雨は犬の面にかかる

### ● 蛙かえるが床ゆかに上がると長雨が続く

### ● 夜明けのどうこう雨どうこう(どういいうはふくろう)

### ● 梨なしが多く実る年は大雨と暴風がある

### ● 水草が青いと早かんばつ、赤いと雨年

### ● 凍傷しもやけがかゆくなれば雨

### ● あかぎれの痛む夜は翌朝霜

### ● 神経痛が痛みだせば雨

### ● とうもろこしの根が伸び上れば風年

### ● 鍋尻なべじりの火事(火花)は天気

## 2、雑の部

俚諺には天候に関するものの外飲食、勤儉、親子関係、人情等雑多なものがあるが、これらの俚諺は概して道徳的な処世訓とか、戒めが多いようである。これらを分類することは困難だから五十音順に配しておきたい。又これらはこの辺で現在も比較的使用されているものの一部を挙げたものであるが、これらの中には全国共通のもの、佐賀県共通のもの、又は全国的なものを佐賀式に言い変えたものなども多く、佐賀とか、大和町独得のものも比較的小ないようである。なお、註釈をつけているが、もつと違った意味で使っている所があるかもしれないので予め断っておきたい。

● 青菜に塩

青野菜をゆでて塩をかけたように、ぐったりと打ちしおれて元気がない。

● 秋茄子あよめに食わすんな

秋茄子はおいしいから嫁に食わせるのはよすぎるといふ姑（しゅうとめ）の嫁を憎む心情とか、逆に、秋茄子はあくが多く、子宮を痛めるので嫁への思いやりから食べさせないとか、「よめ」は「夜目」で鼠のこと、こんなにおいしいのを鼠に食わせるのはもったいないこととか諸説紛々。

● 悪妻は六十年の不作

所により、六十年が百年になったり「三年の凶作」ともいっている。

● 悪事千里

「悪事千里を行く」の略。善いことはなかなか表われにくいけれど、悪いことならどこまでも。

● 悪銭身につかず

不正の手段で得た金はどうせ無益のことに使われて残らない。

● 朝寝坊のよいつぱり

早く寝れば早く目が覚めるのが普通。朝寝か、よいつぱりか、原因はそのどちらかにある。

● 汗なしいうまかもんなし

汗を流して働いたあとは何を食べてもおいしい。

● 当たるも八卦、当たらぬも八卦

うらないなどはあてにならぬ。この辺ではよく「一か八かやってみろ」という。

● あちら立てればこちらが立たぬ

「物も言いようでかどが立つ」し、仲裁をすることはなかなかむずかしい。

● あてたふんどしや前からはずるつ

「あてごとと越中ふんどしは向こうからはずれる」の佐賀化か。ふんどしははずれ易いように、こちらの欲望だけで、あだこうだと予期していても、先方は故意や都合などでだめになってしまうものだ。

あんまり先方をあてにしすぎてはいけない。

● あとの鳥が先になる

「あとの雁（かり）」ともいう。後輩が先輩を追い越すこと。これが子弟間であれば「出藍（しゅつらん）のほまれ」。

● あとは野となれ山となれ

目先のことさえすめば、あとはどうにでもなれ。

● 虻蜂とらす

「二兎を追うものは一兎をも得ず」両方を一時に手に入れようとしてもそれは困難だ。

● 雨降って地固まる

喧嘩してかえって前より仲よくなることもある。悪いと思っ

● 案ずるより生むが易し

無事に生まれてくれればよいがと心配でたまらなかつたが、生んでみればそれほどでもなかつた。やつてもみないうちからむやみに心配するな。

● あんなし饅頭

多久のあんなし饅頭は別として、あんこを入れるべきものに入っていないければ食べられない。役に立たない人、とりどころのない人間のこと。

● 急がば回れ

「もののふの矢はせの渡り近くとも 急がば回れ勢太（せた）の長橋」という古歌がある。琵琶湖を渡るのに、矢はせの渡しが近道だと思っても、むしろ安全な勢太（現在は勢多）の長橋を遠回りしていく方がよい。

● 医者の不養生

いうこととすることがどうも一致しない。養生せよという医者がかえって不養生なように。

● 一寸伸びればひと踊り

もうちょっと、もうちょっとと延引することによって事態を好転させる。

● 痛くもない腹をさぐられる

自分には何ら周知しないことを他人から疑われる、「そばんばちを食う」こともある。

● いたちのちゃんぎり屁

きりぎり舞いすることを佐賀では「ちゃんぎりみやあすつ」というが、いたちが追いつめられて「ちゃんぎりみやあ」したあと、モーレッツなのを一発。まさに苦境の絶頂。

● 一事が万事

ひとつのことは見れば、他のすべてのことも推測できる。

● 一姫二太郎

長子が女、次子が男が理想的というけれど、世の中はまます。

● 一富士二鷹三茄子四鮒五葬礼

四鮒五葬礼はこの辺で付けたものだろうか。これらは吉夢とされているが、徳川家康が駿府（静岡）にいた時のこと、ある日鷹野（たかの）に出て、富士山が目の前にそびえ、茄子が道をはさんで連なるのを見たことから始まったともいい、又上の三つは駿河（するが）の国の名物の順序を表わしたともいっ。

● いつも柳の下にどじょうはいない

一度うまくいったからといって、いつも同じ幸運があるとは限らない。

● 命あつての物種

とにかく命あつてのこと。死んでしまえばそれまでである。「命あつてのいも種」と付加することもある。

● 命の洗たく

「鬼の留守（るす）に洗たく」というのもある。気晴らしをする事。

● いわしの頭も信心から

信ずる心があれば、いわしの頭もありがたく見える。昔はいわしは大衆魚で、魚の中では一番安価だった。

● いわぬが花

「いわぬはいうにまさる」ともいわれ、又「およそ沈黙は多弁にまさる」とか「言葉は銀であり、沈黙は金である」と西洋でもいつている。だが、昭和の現代は……？

● うけに入る

うけは「有卦」と書き、幸福が続くこと。人の一生には有卦と無卦とがめぐっており、有卦に入った年は万事吉なり……とは陰陽師（おんみよううし）の説。

● 牛は牛連れ

これに「馬は馬連れ」と続けてもいう。「類は友を呼ぶ」とか「似た者夫婦」とかいわれるように「類をもつて集まる」と。

● 氏より育ち

い物ならなおさらのこと。又、兄弟姉妹が多ければ後でむしられる。なお、これに「腹ん立つたあすん朝（翌朝）いえ」と続けていう所もある。

● うまかもんは小人数、仕事はうー人数

「うー人数」は大人数、うまい物は小人数が多く食えるし、仕事は大人数でした方が早くさばける。

● 海千山千

「海に千年、山に千年」を縮めたもの。長い間浮き沈みが激しく、苦しい経験をつんで、ひどくずるがしこくなつた者。

● 瓜の蔓に茄子はならぬ

血統は争いがたく、平凡な親から非凡な子は生まれない。「蛙の子は蛙」とか、「おたまじゃくしは蛙の子」とか、「親あ似た亀ん子」とか、いろいろ類似のものもあるけれど「とんびが鷹を生む」とか「氏より育ち」ということもあり、因果の道理は容易にわからない。

● うわさをすればかけ

人のうわさをすると間もなくうわさのご当人がやってくる。人のうわさは余りほめたものではない。

● 江戸の敵は長崎で

「長崎で打つ」を略したもの。時や所を違えて意外の敵を討つことや、怨む者を討たずに関係のない者を討つ、つまりおかつと違いの敵を討つという意味。又「この怨みは、いつかはどこかで晴らすから覚えておけ」という時にも使われる。

たとえ家からは無くとも育て方（教育）によってりつぱな人間になすことができる。教育の効果の重いこと。

● うそ八百

うそが多いこと。うそを列べ立てること。日本では大昔から「八」という数字は「多い」という意味によく使われている。「狸のきんたま八枚敷」のように。

● 打たれても親の杖

もしも他人だったら、ちよつと打たれてもはがいが、親の打つ杖なれば甘んじて……。

● 内はたがいの外すばい

「はたがい」というのは「はたがる」、つまり足を前後や左右に大きく開くこと。「すばい」は細ること。内ではよくしゃべったり威張ったり騒動したりするが、一歩外に出ると黙っている人のたとえ。内弁慶ともいう。

● うどの大木

「うどの大木柱にならぬ」ともいう。からだばかり大きくて何の役にも立たぬ者。

● うまかもん食うて油断すんな

何もしないのにご馳走を出すはずがない。下心あつてのご馳走ならばゆめゆめ油断するな。

● うまかもんはえーのうちー食え

おいしい物はあまりとっておかないで宵のうち早く食べてしまいなさい。夜遅くなれば甘い物なら虫歯のもと、腐り易

● えすかもん見たがい

恐くてたまらないけれども見たいというのが人情。「見たがい」は見たがること。「お化け屋敷」などの見世物が繁昌する原因？

● えりいえてつてちんば嫁御

「あの娘は良い、この娘はあだこうだどすい分詮議（せんぎ）はしたけれど、いざ嫁にもらつて見たら、やっぱりいくつも欠点があった。えり過ぎて迷う。ただしこれは「わがことは棚に上げて」の語。

● 縁の下の力持ち

人の知らない所で、かげながら他人のために骨折ること。人間は誰でも人前で晴れのする所に出たがるし、人が遊んでいる時は自分も遊びたいけれど……。

● おーどーぼうのひけしぼう

「おーどーぼう」は横道者、俗に「わるぼう」、「ひけしぼう」はひきよう者、かねがねはなかなか強いことをいうが、いざという時は一番先に逃げてしまふような人。

● おか目八目

おか目は「傍目」と書く。囲碁（いご）から出た言葉で、囲碁をしている者よりも傍観している方が、八目先まで読める、ということから、当事者よりも局外から冷静に観察すると、物事の判断がはっきりわかるとのこと。人のすることはもどかしく見えるのが人情であり、自分のことは自分には一番

わかりにくいものである。

● 男がかすり飯食うと出世せん

「かすり飯」というのは、はがまの底をかすってつくご飯。これを食うと出世しないということ。

● 鬼の目にも涙

悪人や無慈悲な人でも、時には少しぐらいの善良さや慈悲心を起こすことがあるものだ。

● 鬼も十八、番茶も出ばな

安い番茶でも立ててはおいしい。みにくい女でも年頃には美しく見える。このように、物には盛りがあるということ。

● 帯にや短かしたすきにや長し

「杓子（しゃくし）は耳かきにならぬ」し、物事が中途半ばで、思うように適当なものが得難い。

● 思い立ったが吉日

今日は日がらが悪い、明日はどうのこうのと迷信に陥っては、せっかくのよいチャンスも幸運も逃してしまふ、事を始めるのに猶予は禁物。

● 親あ似た亀ん子

「親に似ぬ子は鬼子」ともいう。親に似ない子はいない。だから子は親の鏡である。

● 親の意見と茄子の花は

千に一つのあだもない

る、地知る、我知る」で悪事は出来ないということ。

● 果報は寝て待て

くよくよするより、運を天に任せて寝て待てということだが、「運を待つは死を待つに等し」ということもあるので……。

● かまん前都に雪隠旅

昔は、台所とつながる「かまや」にはへつつい（くど）が幾つもあり、それぞれ別のへつついで煮たきをした。主婦は忙がしく交通ひん繁、しかも誰でもここへ集まりたがるし、いわゆる、かまの前が都であり、自分の家のかまや以外にはあまり外にも出たこともないし、又出たがらない。そういう主婦にとってはせめてトイレへ行くのが唯一の旅行？ たまたま主婦が「よそ行き」をすると「はんずうがめのずっさい（出ると）うー雨ん降つ（大雨が降る）」といわれたもの。「はんずうがめ」は水を入れておくかめで、外へ出ることがない。

● 亀ん甲より年の功

年寄りだからといって甘く見てはいけない。年功を積んだ者は、万年を経た亀にもまさるから。

● 借る時の仏顔、返す時のえん魔顔

金を借る時は笑顔で相手をほめるが、いざ返す時は金を取られるような気持になる。

● かわいい子は打っておおせ

「かわいい子には旅をさせよ」。誰でもわが子には甘い。もつと厳しく育てよ。現代でいえば「過保護」はするな。

「あだ」は「空」、空花のことで実らない花。多年の経験を積んだ親の意見は子たるものは従いなさい、何か得るところがある。

● 親の心子知らず

親に限らず、目上の人や上司などの心もわからず反対する者もある。「子を持って知る親の恩」とか……。

● おろつきやへそつく

「おろつく」はうろたえる。うろたえればうろたえるほど物事は出来にくい。

● 女と藁屑は残らぬ

どんな女でも適当な配偶者を得てかたづいて行くし、わらも捨てるころはない。役に立たぬ、嫁に行けぬなどあきらめるのは早い。

● 金がいわせる旦那様

色里の女は金でこびを売る。いくら偉い人でも色里では金が必要ればこじきに等しい。

● 金の切れ目が縁の切れ目

「金は親子も他人」とか「金銭は他人」とかいう諺もあるとおり、親しい友人でも、金を貸せば金も友人も失なうことがある。

● 壁に耳あり障子に目あり

「こそこそ三里」ともいう。とかく秘密はもれ易いもの。又、誰も見ていない、誰も聞いてはいないと思っても「天知

● かわいさ余つて憎さ百倍

かわいがつておればおるほど、それが一旦憎しみに変わるとかえつて憎しみはひどくなる。

● かゆいところに手が届く

思うように世話の行き届くこと。痛い所はわかり易いがかゆい所はわかりにくい。

● 勘定合つて銭足らず

計算の上では収支が合っているが、実際は銭が足りない、計画と実際とのくい違い易いこと。

● 聞いて極楽、見て地獄

人から聞いた話と実際に見たことが余りにもくい違っていること。

● 気色がら鼻毛ぞろい

佐賀的な表現で、気色がからりと晴れ、むずむずする鼻毛がすっぱりととれる、つまり一切のもやもやがからりと晴れて爽快な気分になること。

● 気狂いに刃物

気狂いというだけでも危くて油断ができないのに、刃物まで持たせたら、それこそどんなことになるか、悪条件の上に更に悪条件を重ねること。

● 木に竹をつぐ

全く不調和そのもの、大変まずい連続をなす。

## 木仏金仏

更にも一つ「石仏」が続く。とても堅くて情愛などわからぬ冷淡そのもののような人という。「木石漢」とか「石部金吉（いしべきんきち）」も類語。

### 窮すれば通ず

行き詰ってどうしようもなくなった時、ふと名案が浮かび、道が開けることもある。最後まであきらめてはいけない。

### きゆうびんぶゆう（器用貧乏）

何でも一応は器用に出来るが、これといって特にすぐれたものもないので、いつも貧乏している。

### 臭いものには蓋をせよ

悪いことは表に出さない方がよい。根本的に改善しないで、一時的につくらおうとする態度をいう。

### 腐っても鯛

例え腐っても鯛は鯛、生きのいいわしなどよりは良いという事で、もともと価値のあるものは少しくらい価値が落ちても尊いということ。

「切れてもにしき（錦）」ともいう。

### 孝行をしたい時には親はなし

親が生きているうちに早く孝行をせよ。

### 好事魔多し

よい事にはとかくじやまものが入り易い。「凶に乗らない」で

慎重に。

### 郷に入つては郷に従え

「所変われば品変わる」とにかくその土地に入ったなら、その土地の風俗習慣に従ったがよい。むやみに我（が）を立てず周囲に順応したがい。

### こぬか三合あれば養子に行くな

養子に行けば田地も金もたくさんあるが、それは自分がかせいだものではない。男子たるもの独立独歩せよ。

### ごき作りのかげごき

「ごき」は御木椀（ごきわん）という食器。「紺屋の白ばかま」と同じように、一番作り易い立場にありながら、人のものばかり作って自分の物は作れない。自分のことには手が回らない。「餅屋（もちや）は餅食わず」も同じ。

### 転んでもただでは起きん

例え転んでも必ず何か拾って起き上がるというガメツサか。又あつという間に何かをつかんでいるという機敏な人のこと。

### ごんぼうの白ぬたあえ

「白ぬたあえ」はみそをすったり、豆腐をすりつぶして野菜などを混ぜ、味つけたもの。ごんぼうは表面が黒いので白ぬたあえにしてもやっぱり黒はかくされぬ。色の黒い女がおしろいを「こて塗り」してもやっぱり……。

### 佐賀んもんの通つたあとは草でん生えん

葉隠武士道に「勇氣は心さえつくればなることにて候。刀を打ち折らせたにせよ手にて仕合ひ、手を切り落されても肩にてほうり出し、肩切り離されても口にて相手の首の十や十五はくい切るべし」などいってあるから、佐賀の者は剛毅ぼくとつて荒つぱいといわれている。江戸時代の参勤交代の時、佐賀藩士が上洛（じょうらく）する場合、その道筋の草をよくとらせたことからいわれたともいう。

### 先立つものは金

「金の世の中」とか「地獄の沙汰も金次第」とかいわれるように、何をするにも先ず第一に必要なものは金。「動き百」ともいって、ちよつと何か行動すれば百文の金がいっぱいという。だが「金がかたき」ということもある。なかなか金にはめぐり合わぬが、金のために身を亡すこともある。

### さばのさし合わせ

長短相補うという意味で、夫婦のうち、どちらかが気がきいておれば、一方はそうでもない場合などにもいう。又逆に「ちよつと似合いだ」という場合にもいう。

### さわらぬ神に祟りなし

関係さえしなければ、そのことのために禍を招くようなことでもない。いらぬ手出しをするなどの戒め。

### しいらばーの先走り

「しいら者」とか「しいら穂」というが、「しいら」は「しいな」のなまっただもので、稲の実が入っていない空（から）穂

のこと。他の稲穂より一足先に穂を出すのが寒らぬように、おちよこちよ（軽薄な）の人間が人の先に立つて騒ぎ立てること。

### 潮時が肝腎

物事にはすべて適度というのがある。ひき時が大切である。

### しきいをまたげば七人の敵あり

世間は家庭のように甘いものではない。一旦世間に出ると男は多くの敵がある。

### 舌でも出さん

もらうものなら何でも。だが出すものなら舌でも出さぬけんぼう。

### 四斗二斗

一俵の米が四斗あつたり、二斗あつたりで、出来・不出来のする人。つまりどこかは非常に気のきいたことを言ったりしたりするけれども、どこかで抜けている。「二斗八升」というのは少し足りない人のこと。これは佐賀藩時代に米一俵が三斗あつたこともあるので、一俵がとないということから起こつたものという。

### 死人に口なし

死者は何もいわぬ。その生前の言行がよかろうが悪かろうが、人の批判のままになる。

● 四百四病の病があれど 貧より辛いものはない

苦しくない病気はないけれど、貧乏が一番辛い。

● 重箱の隅を楊枝でほじくる

さ細なことまで詮議立てする。

● 十人十色

人それぞれ違っているもの、個性があり癖がある。自分が思ったり考えたりするように人は思っていない。

● 蛇の道あ蛇

蛇の通る道は他の蛇もよく知っている。「餅は餅屋」ともいうように、物には専門の知識があつて、その道の者はよくその道を知っている。又、同類は同類の行動をよく推測すること出来る。

● 借家腹ん立つ

人の腹立つ話を聞いている中に、自分も自然に腹が立つてくる。

● 冗談にも程がある

いくら親しい間からでも、例え親子の間でも、よく考えて言動しないと気まずいことになってしまう。冗談もほどほどにせよ。

● 女子と小人は養い難し

少しく言やつける。女子と小人物は恩義を忘れ、ちよつとした恨みにも口やかましいので、親交を保つことがむずかしい。

● 死んで花実が咲くものか

死んでしまえばそれまで。生きている中に花身を咲かせよう。人生は苦しいことばかりではない。生きておれば良いこともある。

● 死んだがましやあ言わんがまし

年をとったり、病気が少し長引いたりすると、口ぐせのように「早う死んだがまし」というけれど、時が来なければ死ぬものではない。言っても効果のないこと。

● 据え膳食わぬは男の恥

「女性からモーションをかけられたのでつい……」というが、多くは男性が自分を弁護するのに用いる言葉とか。

● 捨てる神あれば拾う神あり

世の中の人の心はさまざま。心して待てばいつかは幸運が訪れるだろう。「待てば海路の日和あり」ということもあり簡単にあきらめなさんな。

● 住めば都

「山の中、山の中一軒家でも、住めば都よわが里よ」の唄の文句のように、一旦住んでみればどんな田舎でも愛着が出てくるもの。又住んで見ればどこでも余り変わりはないという意味。

● 急いては事を仕損ずる

あまり急ぐとかえつて失敗する。「急がば回れ」「おろつきやへそつく」

● 世間の口に戸は立てられぬ

「人の口には戸は立てられぬ」とか「人の口にはふたはされぬ」ともいう。世間の批評やら、うわさ話はとでも止められるものではない。

● 背に腹はかえられん

目前に迫る苦難を避けるためには、永遠の利益も止むなくほり出さねばならない。生活のためなら、他の大切なものも犠牲にして辞さない。又、自分の事のためには、人の事などかまっていられない。

● 船頭多くして舟山へ登る

あちらからもこちらからも意見統出、又ああせよ、こうせよと指揮がまちまちであれば、ついにはあらぬ方向に万事が進んでしまふ。

● 千(万)の倉より子が宝

金銀財宝より子が尊い。

● 善は急げ

「善は急げ、悪は延べよ」を縮めたもので、よい事は今すぐでも取り掛ったがよい。ほっとけば又悪化する恐れもある。

● 禅門も三日するとやめられぬ

● 葬式戻りの医者詮議

死んでしまつてから、あの医者に見せていたら死なずにすんだかもわからないなど、後から詮議してみたところでもうどうにもならぬ。時機を逸してはどんなに後悔しても及ばない。

● そうは問屋がおろさぬ

そんな安値では問屋はおろしてはくれぬ。そう自分の思い通りに相手が応じてくれるものではない。

● そがいおーこも衣裳から

「おーこ」は「おーく」とも言い物をかつぐ天びん棒のこと。「そがい」は先の方がとがっていること。人間は着ける衣裳によつて心も変わる。「馬子(まこ)にも衣裳」ともいう。

● 立っている者は親でも使え

忙がしい時は仕方がない。そばに立っている人があれば誰彼を構わず使つてよい。

● たつ鳥あとを濁さず

飛びたつ鳥は水を濁さぬという。ある地位から立ち去る場合に見苦しくないように後始末をよくして、他の者からとやかく言われぬようにせねばならぬ。

● たで食う虫も好きずき

たでの葉はとても苦いが、これを好んで食う虫もあるように、人もそれぞれの性癖によって好みも違う。自分は好きでも人はわからぬ。

● 棚からぼた餅

「ぼた餅」は牡丹餅と書き、あんこをつけた餅でとてもおいしいもの。思いがけない幸運に出合うこと。「棚ぼた式」ともいう。

● 旅の恥はかき捨て

旅行先ではどんなことをしても知っている人がいないから平気。厚顔無恥のことをいう。

● 短気は損気

事をなすには焦らずに、慎重な態度で行うこと。間違ってもいけないのに、よく確かめもせず捨ててしまつては、もう取り返しがつかない。

● ちよつとのゆうじいよかことなし

「ゆうじ」は用事。「〇〇さん、ちよつと」と呼ばれる時は確なことはない。ちよつとの用事だからと油断してはならない。

● ちんと言えばかん

打てば響くというか、こつちが言えは寸隙(すんげき)をおかず返答の早いこと。反応の早いこと。

● つんぼの早耳

● 遠くの親類より近くの他人

遠い所にいる親類よりも近くに住んでいる他人の方が親しみもあり、又何か事ある時には頼りにもなり、お世話にもなるものである。

● 燈台もと暗し

身近かな事情には案外気がつかなかったり、わからずにいることが多い。

● 毒をくらわば皿まで

一旦毒を食つたと知るや大胆になつて皿までねぶるようになることから、一たび悪事を犯した者が、大胆になつて徹底的に悪事を働くようになる。「えーくそ腹」もこれと同類か。

● 所変われば品変わる

土地土地によつて、風俗習慣や言語等は違うものである。ほほーと感心することもあろうが、反対に向こうがこちらを笑っていることもある。

● どじょうのみつつんごろ

「みつつんごろ」は両方からくつき合う、軽くぶつつかる意。どじょうをたらいに入れると、両方からふちの方を回り、ぶつつかると又逆に回つてぶつつかり、何回も何回も繰返す。このように何回繰返しても物事が一つも進展しないこと。

● どじょうもべーべー、たにしもきやーきやー

「べーべー」は魚、「きやーきやー」は貝の幼児語。どじょうも魚の類、たにしも貝の類ということで、姿形は変わつても

都合の悪い時や悪口等に限つて聞える。又つんぼはよく聞き取れない時でも、つんぼでないことを装うためにすぐにかつたような顔をする。この場合は「つんぼの早合点」という。

● 出もんはれもん所嫌わず

屁(へ)もはれ物も所構わず発生する。どうしようもないことだけれど、だからといってどこでもお構いなしに屁をふつてよいということにはならぬ。

● 出る釘は打たれる

「出る杭(くい)は打たれる」ともいう。出過ぎる者、口出しをする者、すぐれた者などはとかく大ぜいの人からねたまれたり、批判されたりする。

● 天は自ら助くるものを助く

天の神は他人の力に頼らず、自分自身の努力で事に当たる人に幸福をもたらすものである。

● 天罰てき面

「天網(あまのあみ)かいかい疎(す)にせしめざす」とある通り、天は広大で網目(あみ)があらぬように見えるけれども、決して悪人を見逃すようなことはない。善悪それぞれの応報を下すものである。

● 豆腐(とうふ)にかすぎやー、ぬかに釘

「かすぎやー」は「かすがい」で柱等を動かぬように止めるコの字型の金物。全く手応えがない、何の効果もないことの例え。「のれんに腕押し」ともいう。

同類であり、つまらぬ者でも一人前と思つて例え。

● 隣の菜のしゅつ(汁)

「隣の花は赤い」とか「他人の飯は白い」とかと同じ。うち(うち)の馳走(ちしう)よりも隣の菜(さい)葉汁(えじゆ)がおいしいようである。つまり何でも他人の物はよく見える。

● 捕らぬ狸の皮算用

まだ狸を捕りもしないのに、狸の皮は幾らに売れるだろう。その金(かね)でああしたい、こうしたいと勘定(かんてい)すること、まだ手に入れないうちからあてにしていること。「生まれぬ前のむつきぎめ」と同じ。「むつき」はおしめのこと。

● 取ろ、取ろ、取ろは取られのもと

取ろ、儲けよう(たくわ)とあまりどん欲(どんよく)を出すとかえつて先方から取られてしまう。

● どんぐりの背くらべ

同じぐらいで、どれが大きいともわからない。凡人ばかりで、すぐれた人(ひと)が見当たらないこと。

● とんびに油揚

二人が争つている間に第三者(だいさん)がその利益(りやく)をさらつてしまふこと。

● 無い袖(そで)は振れぬ

「坊さん(ぼうさん)のくしけずり」のように、持合わせ(もちあわせ)がなければどうにもされない。救い(きうい)ようがない。

● 無かもん食おうは童のぜんしよう

「ぜんしよう」は無味物ねだり。子供に限らず一般に人間は無味物を欲しがり、禁止されていることをやりたがるものである。分別のある人は、無理をいうものではないということ。

● 無くて七くせ

「無くて七くせ、あつて四十八くせ」という。人には多かれ少なかれみなくせがあるものである。いたずらに人のくせばかり言つてはいけない。

● 情は人のためならず

情をかけてやると甘えたり、つき上つたりするから情をかけてはいけないということではない。情を他人に与えれば、めぐりめぐつて自分によい報いがあるということ。相手が感謝しなくとも慈悲を施した良心の満足があるはずであり、それが尊い。

● 七度探して人を疑え

物がなくなつた時は自分で何度も探せ。よく探もしないで、人を疑つてはならない。

● 生兵法は大ききずのもと

「生兵法」を「生療法」ともいう。何事によらず、少しばかり知っているからといって、それを鼻にかけたり、自信を持ち過ぎたりして、軽々しく物事を行えば、大失敗をすることがある。

● 習おうより慣れろ

● 二度あることは三度ある

失敗や不運が続く時使われるもので、くれぐれもご用心をということ。失敗や不運が続くことを「とろくのかぶつとつ」という。

● 女房と畳は新しいほどよい

あまり亭主ずれもせず、すなおな女房だったがいづの間に……だが、畳のようにちよいちよい取替えもされぬとあれば女房たる者は……。また、「女房の悪きは六十年の不作」というものもある。だが、「女房と鍋釜は古いほどよい」という諺もある。

● 盗人たけだけし

何事かに失敗した者が、内心ではびくびくしながらも虚勢を張つて強がりを示すこと。「引かれ者の小唄」ともいう。罪を犯してひかれていく者が、わざと平気を装い、鼻唄などを歌つていく。

● 盗人を捕えてみれば我が子なり

とても意外でどう処置していいかわからない。我が子に限つて……と思わず、たとえ親身の者であつてもゆめゆめ心を許してはならない。

● ぬらいどんぼう

「どんぼう」は「どんこ」、「どんこう」などという川魚。はやや鯉などのように動作が活発でなく、よく浅瀬にのんびりいたり、石垣の間にかくれている。動作の鈍い人、気がきかない、感の鈍い人の例え。

何事によらず、人だけを頼つて教えてもらつたり、自分の努力で慣れる方がよく上達する。

● ならぬ堪忍するが堪忍

どうしても我慢できないことをじつとこらえるのが真の我慢だ。これは徳川家康の「堪忍は無事長久の基、堪忍のなる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍」からとつたものだろうか。

● 二階から尻あぶり

「天井から尻あぶり」とか「二階から目薬」と同類。非常に回り遠いこと、又は効果がないこと。

● 逃がした魚は大きい

釣落した魚、とり逃がした魚は誰も見ていないから、こんなに大きかつたといつてもわからない。「死んだ子は賢い」などともいうように、失つたものは価値が大きかつたと思う人間の執着（しゅうちやく）をいうか、又は人のいうことはあてにはならぬ、信用されぬということか。

● 似たもん夫婦

「割れ鍋にとじぶた」ともいう。性格や趣味の似たものが夫婦になること。又は夫婦が互いの感化力によって性格や趣味が似てくること。

● 煮ても焼あても食われん

悪賢く、ずるくて扱かにくい人のこと。

● ぬれ手に粟

「ぬれ手に粟のつかみどり」の略。骨を折らずに多くの利益をうること。

● 猫にかつおぶし

かつおぶしは猫の大好物。信用できないものを信じて禍を招くこと。「猫に魚の番」も同じ。

● 猫に小判

ありがたいこともちつともありがたいと感じないこと。又、持主次第では、せつかくの貴重な物も役に立たない、価値がないこと。

● 寝耳に水

眠っている時、耳に水を入れられるように、不意の出来事にひどく驚くこと。「足もとから鳥」ともいう。

● 寝る子は育つ

眠りきらずによく泣く子は体のどこかに欠陥があるか、ひもじいか、とにかくよく眠ることは健康な証拠。だから子供のことを「ねんね」というとか。

● 寝た子を起こす

寝かしておけばうるさいこともないのに、わざわざ起こしてうるさい思いをする。つまり、いらぬことをして騒ぎを起こす例え。

● 能ある鷹は爪を隠す

すぐれた才能や手腕を持っている人は、みだりにこれを人に見せびらかすようなことはしない。

● 野くそもといどころ

人糞が重要な唯一の肥料であった頃、野くそもとりどころによつては役に立つもの。一概に役に立たぬと諦めるのは早計で、どんな人でも何かとりどころはあるものだ。

● 残り物に福あり

真先に手を出すよりも、残り物を最後にとるような心掛けの人に、かえって幸福が待っているものだ。あまりうろたえて手を出すな、欲張るなどということ。

● のどから手が出る

欲しくて欲しくてたまらない。

● のどもと過ぎれば熱さ忘れる

苦しい目にあつても、その当座は身に沁みているが、しばらくするともう忘れて、又同じあやまちを繰返す。苦しい時の人の恩情も、自分が楽になると忘れてしまう。

● のみのきんたま

誰も見たこともないだろうが、あつても知れたもの。小心者又は大変小さいことの例え。

● 乗りかかった舟

事をやり始めて、途中でやめることができない状態。

● 馬鹿汁三ばい

みそ汁にしてもお吸物にしても一ばいが原則、おいしいからとて欲張るのは見苦しい。

● 馬鹿と鉄は使いよう

馬鹿でも旨くおだてればよく働くし、鉄も使いようではよく切れる。工夫が足りないのではないか。

● 馬鹿につける薬はない

「馬鹿は死ななきや治らない」といわれる通りよくなるものではない。

● 馬鹿のいっちょ覚え

馬鹿はある一つの事を覚えるといつまでもその事だけを覚えてはいる。融通がきかず、発展性がない。

● 初物食えば七十五日

その年初めてとれた野菜や果物などを食べると七十五日は長生きするという。新鮮なものを食べよということか、又は丹精こめて作った収穫の楽しさと感謝の心だろうか。

● 話半分

見ると聞くとは大違い。まあ、人の話というものは半分ぐらゐが本当だと思つて聞けばよい。

● 腹の皮が張れば目の皮がたるむ

腹一ぱい食えば眠くなる。原因があつて結果がある。

● 腹八合に医者いらす

腹一ぱい食べないで少し控え目にしておけばいつも健康で医者には必要だ。「腹も身の内」…腹も自分の体の一部だから食べすぎないように。

● はんずうがめかぶい

「はんずうがめ」は飲料水を入れておくかめ。母親が外出する時、子供が置いてけぼりをくうこと。

● ひだるか時あうまんなかもんなし

満腹の時ほどなご馳走も魅力はないが、ひもじい時はどんなものでも旨いものである。ご飯がおいしくない人は動きの少ない人か、心身に異常のある人。

● びつきいも鼻つく、河そうもぎやーけすつ

「弘法も筆の誤り」とか「猿も木から落ちる」と同類。「びつきい」は蛙、「河そう」はかっぱのこと。「ぎやーけ」は風ひきのこと。失敗は誰にもあるものだ。

● 一つこたー同じこと

一つのことをいろいろ言葉をかえていっても結局は同じこと。同じ事を繰返えすな。

● 人には添うてみよ、馬には乗つてみよ

人はつき合つてみて始めてその性格がわかるものである。つき合つてもみないで、軽々しく人のよしあしを判断してはならない。

● 火のない所に煙は立たぬ

火気のない所から煙が出るはずがないように、何か事実があるから黒いうわさなどが流れる。

● 人のうわさも七十五日

いくらうわさがあつてもしばらくすると消えてしまふ。とかく世間はうるさいけれど、一面健忘症でもある。

● 人の事は我が事

人が苦境に陥つたり、失敗したりすることを笑つたり侮つたりすると、いつ自分もそういう境遇になるかもわからない。

● 人のふんどしですもうをとる

他人のものを利用して自分の用を足すこと。ずるいことの例え。

● 人のふりみて我がふり直せ

人のやり方をみて自分のやり方の善悪を反省し、直すべき所があつたら早く直しなさい。と同時に、人のやり方をとやかく批判するものではない。

● 一つ穴のむじな

「一つ穴の狐」ともいう。ぐるになつて悪事を働く仲間をいう。

● 人の頭の蠅より我が蠅払え

他人の事をかれこれ心配するより先に、自分の事を考えた方がよい。あまり他人の事ばかりいうな。

● 人は一代、名は末代

その身は一代で終わるが、その人の名は後世まで長く残る。生きていく間の栄華よりも名声が後世に伝えられる方が尊い。

● 人は見かけによらぬもの

人は外見だけではわからぬもの。軽々しく人の善悪を判断してはならぬ。特にあの人には善人だとばかり思っていたのに実は悪人だったという場合によく使われる。

● 火吹きびんぶゆー

「びんぶゆー」は貧乏、かまどに燃えにくい薪をくべて火吹竹で一生けん命に吹くけれどなかなか燃えてくれない。よい薪だったら、よいかまどだったら燃えるのに。大変貧乏していること。

● 人を呪わば穴二つ

人を害しようとする者は自分もまた害を受ける。自分の墓穴も用意せよ。

● 人を見たら泥棒と思え

軽々しく人を信用するなどということだが、旅は道連れ、世は情」とか「渡る世間に鬼はない」という諺もある。

● 貧すりやどんする

人間は貧乏するとすっかり愚鈍になつてしまふ。

● 貧乏暇なし

貧乏のため生活に追われて暇がない、……心のひまも。

● ふうけても佐賀もん

「ふうけ」は阿保（あほう）とか馬鹿ということ。佐賀んものうぬぼれだろうか、自信のほどを示すものだろうか。それにしても明治維新前後の佐賀んもんはたしかに日本の土台骨だった。岩倉具視も二子をわざわざ遠い佐賀へ教育を受けにやっている。

● 夫婦喧嘩は犬も食われぬ

犬は大概の物は食うがこれだけは振り向きもしない。夫婦喧嘩は大いの場合、ちよつとした痴（ち）情から起こることが多く、他人がとやかく干渉すべきものでもない。「夫婦喧嘩と西風は夜になれば治まる」そうな。

● 二人口は食われるが一口は食われん

一人で生活していても生活必需品は皆同じ。二倍になつても数学的な答えにはならない。

● ふゆうぼーの節句働き

「ふゆうぼー」は怠け者、仕事嫌い。「不精者の一時働き」も同類。かねがねは遊んでいる人が外の人が休む時に働いて、働いているという格好をつけている。

● ふんみやー腹三日

「ふんみやー」は振舞いのこと。よそに行つてご馳走を出され、三日くらい食べなくてもいらいに腹一ぱい食べること。賤しいということか、遠慮するなどということか。また「我鬼（がき）の法事に会つたこと」というのがあるが、これは

恥も外聞もなくガツガツ食うたしなみのなさを戒める諺。

● へそで茶わかす

大笑いすることの例えだが、本来は非常に多忙なことをいう。

● へくそかずらも一盛り

「へくそかずら」は垣根の樹木等にはい上る蔓（つる）科の植物で、白い小さな花を咲かせるが、匂いが悪く人からあまり好かれない植物。「鬼も十八、番茶も出花」と同じく、人には皆若い盛りがあること。

● 下手の考え休むに似たり

将棋の下手な人が駒を持って長時間考えても、休んでいるのと同じだ。愚者が長時間考えても、どうせ名案など出るはずがない。

● 下手な鉄砲でも数うちやあたる

いくら下手でも根気よくやれば、しまいには成功する。

● 下手の道具立て

下手に限って道具ばかりそろえたり、あれが悪いの、これが悪いのと苦情ばかりで、ほんとの仕事はなし得ない。

● 下手の長談議

早く止めてくれればよいがと思われるように、話のまずい人に限つて長くなり息屈になるものだ。

● 下手の横好き

下手ではあるが、かえつて物事が好き、よく謙遜するという時

に使う。

● 坊主憎けりや袈裟まで憎し

人が憎いとその人の所持品まで憎くなる。狭量の人の陥る感情のこと。ただし英雄豪傑等の遺品が尊重されるのは、これとは反対だけれども道理は同じである。

● 棒ほど願うて針ほどかなう

願ひは多いが、かなえられるのはほんのちよつぴりである。あんまりあてにはいけない。けれども希望は大きく持つと。

● 吠えつく犬はかみつかぬ

べらべらしゃべる人、わいわい人前で騒動する人には、腹黒い人や悪人は案外ないものである。だからといって、人の前で吠えろということにはならない。

● 仏作つて魂入れず

「画龍点睛を欠く」と同類か。せつかく事をしながら、肝じんかなめの所が抜けていること。

● 仏の顔も三度

どんな温和な人でも、いやな事を何度か重ねられると、ついには腹を立てるものだ。

● 骨折り損のくたびれもうけ

せつかく苦勞したけれども、何の効果もなかった。

● ほめられて腹かくもんなし

あいつ、ほめているなとわかっていてもいやな気はしない。でもあまりほめすぎると、かえって真実味がなくなり、「みやーす」になってしまい、ほめられる人は「こそばいか」になってしまふ。

● ほれて通えば千里も一里

好きな人の所へ通うのは遠路も庄わなない。好きな事で苦勞するのは、少しも苦勞と思わなない。

● まかぬ種は生えぬ

働かないでは富もない。原因がなければ結果はない。

● 馬子にも衣裳

貧相の人でも衣裳によって人品が良く見える。服装だけでは人の真価はわからぬ。しかし、外觀によって、内容が引き立つこともある。

● 待てば海路の日和あり

我慢して待っていると、よい時節も来るものだ。あまりうろたえてはいけなない。

● 真綿まわたで首をしめる

じりじりと人を責める。じりじりと苦しめること。

● 身から出たさび

因果応報ともいう。悪い結果になったのも自分で原因を作ったからだ。自分が悪かった。あきらめるほかはない。

● 三つ児の魂百まで

幼児の性質というものは死ぬまで変らぬ。「雀百まで踊り忘れず」の通り、幼時教育の大事なこと。

● みやーらん仏え罰あかぶらん

神仏などへ参ったために交通事故にあつたり、転んでけがしたり、財布を落したり、すりにあつたり。家にじつとしていれば何事もなかったのに。あまり外出をし過ぎると、危険な目にも会うものである。

● 身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ

自分の命を犠牲にする覚悟があつてこそ、窮地を脱して成就させることが出来る。「虎穴に入らずんば虎児を得ず」と同類。

● 見んこと清し

実際に見ていないから不潔な事もわからない。汚れた手で料理をつままれても、人の食べ残りを入れられても。外見の美しい人でも中身はわからぬ。中身まであまりせんさくするな。

● 昔とつたきねづか

一度習い覚えた事はいつまでも忘れることなく、その腕前を發揮することが出来る。昔の技倆が思わぬところで役に立つ。

● 娘一人にむこ八人

欲しい者はたくさんいるが、やる物は極めて少ない。困ったな—という裏に嬉しい気もする。また、少ない物を多くでばかい合うこと。

● 無理が通れば道理が引込む

無理と道理は両立しにくい。無理なことでも、もつともらしく強く主張されると、道理の方がかえって非道のように聞えて引込まねばならない時がある。

● 名物にうまかもんなし

「名所に見どころなし」と同様、名物と言われるものにおいて、名物はなし。「名は体を表わす」とは逆に、名前は良くても内容が伴っていないということ。

● 目からはいつて鼻へ抜ける

実際にこんな事があり得ないように、機敏で何事にもよく通じている利口者、すばらしく気がまいていること。

● 目つつう鼻つつうを笑う

「目つつう」は目くそ、目やに。「鼻つつう」は鼻くそ。自分の汚ないこと、欠点には気付かず、相手の汚なさ、欠点を笑う愚かさ。

● 盲蛇におじす

恐いもの知らず。無鉄砲者。又相手を見る目なく、無智な者は相手の恐るべきを知らない。

● 目は口ほどにものをいう

口に出さなくとも、目付きで気持を相手に伝えることが出来る。時と場合によっては、目は口以上に効果のあるものである。

● めんどりが歌えば家に女が禍する

「めんどりが歌えば家亡ぶ」ともいう。妻が権力を振う家は、女が禍して家が亡びてしまふ。

● 餅は餅屋

「蛇の道はへび」と同じく、人には各専門がある。専門家は熟練している。

● 元のさやへ収まる

別れたりくつついたり、喧嘩したりしている男女が、再び元の状態に戻る時に多く使う諺。

● 元のもくあみ

再び元の状態にかえること。「労して功なし」とか「骨折損のくたびれもうけ」などの類で、したことが結局何にもならなかったこと。戦国時代に大和の郡山城主筒井順昭が病死する時、まだ幼い子順慶の身を案じて、自分の身代りに、声がよく似ている盲人木阿弥（もくあみ）を寢室に寝かせ、三年間衷を隠させた。衷を発して、木阿弥は又ただの一人に帰った故事から、つまらぬ者が思わぬ幸運に会い、又元の状態に戻す時の例え。

● 桃栗三年柿八年

桃や栗は苗を植えてから三年、柿は八年しないと実がならない。資本を投じてても、相当の年月を経なければ、それ相應の利益を得ることは出来ない。あまり功を焦ってはいけなない。

● もらいものに苦情

人からもらった上に、苦情をいう勝手な欲のかたまり。

● 焼け石に水

よく焼けた石に、少々の水をかけてもさめないように、いたずらに労力や金を費すだけで、少しも効果が見えないこと。

● 安かろう悪かろう

安い物を買って得意になっている人もあるが、安い代りに品質も悪い物が多く、あまり得にはならない。

● 安物買いの銭失ない

粗末な品物は値段は安い、長持ちしないから結局は高くつくものである。

● やせ子のうーめし

食べ過ぎるから胃腸をこわして肥えないのか、肥えるための大めしか。

● 柳に風折れなし

「柳に雪折れなし」ともいう。無理に抵抗すればかえってやられる。「柔よく剛を制す」といわれるように、機に依じて行動すれば、自ら身を安全に全うすることが出来る。病弱者は常に健康に留意して、無理をしないからかえって長生きをする。

● 柳は緑、花は紅

すべて何事でも、無理なく自然であった方が尊い。男は男らしく、女は女らしく。禅僧の悟道などというのも、つまりは宇宙や人生をすなおに、自然に見るといふことらしい。

● やはり野におくれんげ草

れんげ草は野原で見るととても優美だが、持ち帰って盆栽にでもすると何の趣もない。物は各、あるべき所におかなければ不恰好であり、その価値を發揮しない。

● やぶ蛇

「やぶをつついて蛇を出す」を縮めたもの。あまりせんざくしすぎて、かえって自分の不利を招くこと。余計なことをして、かえって災を招く。

● 病は気から

病気は心配や苦勞から起こる。又、自分で病気だと信ずれば、ほんとうの病人になる。少しくらいどうかあってもあまり気にかけてすぎないように。

● やみ夜に星

暗夜とて星はどこかにはあるはずだが、とても探し出せない。わかりにくいことの例え。「やみ夜に鉄砲」は当てのなこと、目標に当たらないことをいう。

● 行きがけの駄賃

事のついでに外の事もすること。昔、宿場から宿場へと荷物運ぶ駄馬賃で、荷主から正当の賃銀をもらいながら、更に別の人から頼まれて荷物を運び、その賃銀も受取ることから起こったもの。

● 夢は逆夢

悪い夢を見た時、その反対の良い事があると気安めという言

葉。

● 用心は深う、やーまちや浅う

「やーまち」はけがのこと。できるだけ深く用心をし、もしけがしても浅い(軽い)けがですませよということ、用心の上にも用心をせよといまじめ。

● 欲にや目のなか

欲に目がくらむと事の是非善悪もわからなくなってしまうものだ。

● 世は相持ち

「世は回り持ち」ともいう。世の中は順番に回ってくる。誰か特定の人ばかり良い事は続かないから、そう悲観することはない。又、自分の事もやがて人の事になる。「昨日の旦那は今日のかごかき」とか、「昨日の小僧は今日の主人」と同類。

● 夜目、遠目、傘のうち

女は夜みた時、遠くから見た時、傘をさして下の部分が見える時は、最も美しく感じられるものである。世の中の事物もあまり接近してみると欠点が見えやすい。一説に「よめ」は嫁と書き、これは内密に嫁を見に行くことを言ったもので、俗に「牛見」ともいう。牛を見るとかこつけて行くが目指す女は遠くの方で、すげ笠をかぶり草むしりをして顔を上げてくれない。ああ、そのじれったさ。

● 嫁は来た時仕込め

嫁は来た時仕込まないで、始め甘やかすと永久に頭が上らなくなる。

● 嫁と名が付きゃわが子でも憎い

姑(しゅうと)根性というもので、目に入れても痛くないわが娘でも、嫁となればつい憎さを感じる。

● 弱り目にたたり目

「泣きづらに蜂」と同じ。不運の時には不運が重なるものである。

● 来年の事を言えば鬼が笑う

この移り変わりの激しい世の中で、来年はああしよう、こうしようといったところで、全く当てにならないものではない。いたずらに来年の事を云々することの愚をあげていった言葉。ただし鬼を笑わせる唯一の手？

● 楽あれば苦あり

安楽をむさばってれば、それが禍して必ず苦勞がやってくる。その反対が「苦は楽の種」

● 理屈と膏薬はどこでもつく

膏薬はどこにでもつけることが出来るように、物事の理屈もつけようと思えばどんな事にもつけられる。

● 両手に花

一時に多くの良い物を手に入れた時の喜び。

● 類は友を呼ぶ

同じ趣味の者が相集まること。又似た者同志の集まりのこと。「類をもって集まる」ともいう。

● 労して功なし

せつかく苦勞しても報いが無い。「骨折り損のくたびれもうけ」

● ろくでなしが人のかげ口

自分は一人前でもなくせに、人のかげ口は一人前にする。小人は自分を実力以上に誇示したがる。

● 論より証拠

口先で議論するよりも事実の示す証拠が大切である。

● 我が頭の蠅を追え

いらぬ他人の下世話(げせわ)をやくより、先ず自らを反省して自分の短所を直せ。

● 若い時の苦勞は買つてもせよ

「鉄は熱中に打て」とも言われるように、若い時の苦勞はすべて我が身の修養となるものだから、苦勞を避けないで自分から買つてもしたがよい。

● 我が子自慢

親というものは自分の子供には目が無い。悪い事をしてても「うちの子に限って」というのが親の口癖。平凡な子でも他に自慢したいものである。「我が子には目が無い」といわれるように、愛の色眼鏡があまりにも濃いので、つい子供を正しく見ることが出来なくなるものである。

● 渡りに舟

困りきっている時、ちょうどそこへ都合のよい事が起きること。

● 渡る世間に鬼はない

「人を見たら泥棒と思え」というけれども、世の中にはそう悪い人間ばかりはいない。

● 割った茶碗をついでみる

割った茶碗をついでみたところで、今更どうにもなるものではない。愚痴っぽく思い切りが悪いこと。ただしすぐれた接着剤がなかった時代のこと。

● 悪いことは重なる

一度失敗すると何回も失敗が続くことがある。「二度あることは三度ある」と同じように、不運というものはよく続くものである。この反対が「うけに入る」

● 割れ鍋にとじぶた

「とじぶた」はこわれた鍋ふたを修繕したもの。両者ともお粗末千万なこと。似たもの夫婦のこと。

● 若後家の薄化粧

誤解を招く恐れがあるから、そういう不謹慎なまねはしない方がよい。

● 笑う門には福来たる

とにかく、泣いたりしかめたり怒ったりよりも、和合、平和、快活、明朗なことは、幸福を招く原因になるものである。

3 いろはがるた

いろは四十七字に京を頭文字として諺や例え等を読んだものである。絵札と読み札に分かれ、絵札を列べて多く取った者が勝ちになる。安永三年(一七七四)京都で刊行された「児童教訓伊呂波歌」が始まりで、主に子供の正月遊戯に用いられた。絵札をばらまいて取る「ちらし」と、二組に分かれて争う「源平」という遊び方がある。かるたに読まれているものは、一般庶民の生活信条や処世要領訓になっていたようで、今でもよく使われている。ユーモアを持った生活の知恵から出た教訓とか民衆の訴えといつかため息というかそのやる瀬なさ等を読み込み、当時の封建制度に対する反抗とか願いとかがいふものを諺に託して表現したもの、あるいは庶民的楽天性のものなど雑多になっているが、その代表的なものは次のとおりである。

イ	一寸先は暗	中京で訂正され諸国に伝えられたもの	江戸で改められ一般的になったもの
ロ	論語読みの論語知らず	一を聞いて十を知る	犬も歩けば棒に当たる
ハ	針の穴から天をのぞく	六十の三つ子	論より証拠
ニ	二階から目薬	花より団子	同上
ホ	仏の顔も三度	憎まれっ子神直し	憎まれっ子世にはばかる
ヘ	下手の長談義	惚れたが因果	骨折り損のくたびれもうけ
		同上	尻をひつて尻すばめる

ト	とうふにかすがい	遠い一家より近い隣	年寄の冷水
チ	地獄の沙汰も金次第	同上	塵も積れば山となる
リ	繪言汗の如し	同上	律義者の子沢山
ヌ	ぬかに釘	盗人の昼寝	同上
ル	類をもつて集まる	同上	るりもはりも照せば光る
ヲ	鬼も十八	鬼の女房に鬼神	老いては子に従う
ワ	笑う門には福来たる	若い時は二度ない	割れ鍋にとじ蓋
カ	蛙の面に水	陰裏の豆もはじけ時	癩の瘡うやみ
ヨ	夜目遠目傘のうち	横槌で庭掃く	よしのずいから天井のぞく
タ	立板に水	大食上戸餅喰い	旅は道連れ世は情
レ	連木で腹を切る	同上	良薬口に苦し
ソ	袖振り合うも他生の縁	同上	総領の甚六
ツ	月夜に釜を抜く	爪に火をともす	月夜に釜を抜く
ネ	猫に小判	寝耳に水	念には念を入れ
ナ	なす時のえんま顔	習わぬ経は読めぬ	泣面に蜂がさす
ラ	来年の事を言えば鬼が笑う	楽して楽知らず	楽あれば苦あり

ム	馬の耳に風	無芸大食	無理が通れば道理引込む
ウ	氏より育ち	牛を馬にする	うそから出たまこと
イ	いわしの頭も信心から	いり豆に花が咲く	芋の煮えたもご存知なく
ノ	のみといえばさいづち	野良の節句働き	のど元過ぎれば熱さを忘る
オ	負うた子に教えられ浅瀬を渡る	陰陽師身の上知らず	鬼に金棒
ク	臭いものには蠅がたかる	果報は寝てまで	臭いものにはふた
ヤ	暗夜に鉄砲	闇に鉄砲	安物買いの銭失ない
マ	まかぬ種は生えぬ	待てば甘露の日和あり	負けるは勝
ケ	下駄に焼味噌	下戸の建てた蔵はない	芸は身を助くる
フ	武士は喰わねど高楊子	同上	芸は身をおくる
コ	これにこりよ道斎坊	志は松の葉	文はやりたし書く手は持たず
エ	椽の下の力持ち	えんまの色事	子は三界の首かせ
テ	寺から里へ	天道人殺さず	えてに帆をあぐ
ア	足下から鳥が立つ	阿呆につける薬はない	亭主の好きな赤烏帽子
サ	竿の先に鈴	さわらぬ神に祟りなし	頭かくして尻かくさず
キ	義理と種かかねばならぬ	義理と種	三べん回わって煙草にしよう
			聞いて極楽見て地獄

ユ	幽霊の浜風	油断大敵	同上
メ	盲の垣視 <small>のぞ</small> き	目の上のこぶ	同上
ミ	身は身でとおる裸ん坊	身うりが古み	身から出たさび
シ	しわん方 <small>かた</small> の柿の種	尻食 <small>しり</small> え観音	知らぬが仏
エ	縁と月日	椽 <small>え</small> の下の力持ち	縁は異なもの味なもの
ヒ	ひょうたんから駒 <small>こま</small>	貧相な重ね食 <small>かじ</small>	貧乏暇なし
モ	餅は餅屋 <small>もち</small>	桃栗 <small>もも</small> 三年柿八年	門前の小僧習わぬ経を読む
セ	聖は道によりて賢し	背戸の馬も相口	背に腹はかえられぬ
ス	雀百まで踊り忘れぬ	墨 <small>すみ</small> に染まれば黒くなる	粹 <small>すい</small> は身を食う
京	京 <small>いなか</small> に田舎あり	(なし)	京の夢大阪の夢

#### 4 迷信その他

いつごろ、だが、どこで、どんなことから言い出したかわからない迷信、戒、呪阻、占い等伝統的な信仰の中に私たちの先祖は成長してきた。私たちの魂の奥底には今なおこれらの伝統的信仰が深く根ざし、私たちの生活を支配しているものもある。単なる迷信と思いついながらもなおどこか心の隅すみでささやけばついそれに従ってしまふ弱点じやくてんというか、妄信もうしんというか、そういうものを持つていものである。今もひのえつまの年と言えば日本中出生率が急減するし、結婚と言えば大安吉日を選び、葬式と言えば友引

きの日を避けるようである。時勢の推運に伴ってこれからも次第に廃れて行くのもあろうし、新しく作られることがあるかも知れない。以下、大和町でいわれていたものを古老に聞いたまま書き連ねておくが、このほかにもまだまだたくさんあるだろう。

● 朝右夕左(朝右耳、夕左耳がかゆい時は何か良い事がある)

● 生き物を捕る家には良い子が生まれぬ

● 家の鬼門きもんをふさいではいかぬ

● いちよついの木を屋敷に植えると家が栄えぬ

● 一寸百足ひかにさされると長者になる

● 井戸には水神様がおられるから埋める時は竹筒を  
● 外出する時は荒神さんを拜んで行けば厄やくを逃のがれる  
● 柿かきの木をたけば貧乏する

● 犬は三日飼えば三年恩を忘れない

● 上歯が抜けたらはんずうがめのそばに置き。下歯

● 白しろの中に子供こどもを入るとふとらぬ

● お多福か風邪かぜはわらずとを作り、肩にかついで行き

● 川へ流せばよくなる

- 雷は鋭い爪で好んで人間のへそを食う
- 雷がひどい時は麻蚊帳に入り仏壇に線香を上げて  
「ここは桑原桑天井」と唱えれば落ちない
- 雷で焼けた家は焼けぶとる
- 髪の毛は川へ流すと長い髪が生える
- からすが鳴けば死人が出る
- 観音様を信じんすれば子供が授かる
- 廁の掃除をよくする女は美人を生む
- 北枕に寝るものではない(死者は北枕にする)
- 北枕でお産をすると難産
- 兄弟爪はとるもんじやない
- 杵にくつついた餅をかぶりついて食うと齒ぎしり  
がとまる
- 着物は左むねにつくらうもんじやない
- 供養の餅は子供に食べさせるもんじやない
- 子供の火じゃーけ(火遊び)寝小便のもと
- 申の日にたたみをはぐもんじやない
- ご飯を食べてからすぐ横に寝ると牛になる
- ご飯を食べる時、石をかむ者は親不孝者
- ごまは屋敷に植えるもんじやない(葬式の時使われるから)
- 蘇鉄は屋敷に植えるもんじやない(蘇鉄は鉄分の肥料が必要、つまり金を食うから貧乏する)
- 敷居は親爺の頭だから乗ってはならぬ
- しぎー(足のしびれ)がする時はつばを額に三べんつけるとよくなる
- 杓子に人形をかき道端に立てると百日咳が直る
- 菖蒲湯で鉢巻をすると頭痛が止まる
- 菖蒲湯に入ると病にかからぬ
- 精霊とんぼは仏をからって(背負って)くるから捕ってはならぬ
- 白蛇は弁天様の使いだからいたずらするな

- そうけを頭にかぶると雨が降る
- 地面に寝ている下をもぐらが掘ると腰が立たぬ
- 田植の夢は悪夢
- 竹箸木箸で食うもんじやない(これは死者を火葬して骨を拾う時に使う)
- たたみは四つ角が一点に会わぬようにしけ
- ちごんぼうはまくな(一日、二日と日を数える時「ち」と呼ぶ日にまくのがちごんぼう)
- 茶柱が立てば縁起がよい。人に言わないで黙って飲み込むと良いことがある
- 茶は屋敷に植えるもんじやない
- 蝶を捕ればおこりふるいになる(おこりふるいは古代は「わらはやみ」といってマラリヤ熱のよう一日の中に数回高熱が出て寒けがひどい病氣)
- 机に足をのせると罰かぶって足が額にひつつく
- 椿材を建物に使うと化物が出る
- つばめは極楽の使いだから捕ってはならぬ
- つばめにいたずらすると眼病にかかる
- つばめが巢を造る家は繁昌する
- 旋風に会えば病気になる。ホーイホーイと言えばよけられる
- 爪を火鉢にくべるとらい病になる
- 手ぬぐいを拾うと世話を拾う
- 友引の日葬式をすると死者が続く。その日する時は人形を供に葬ればさわりがない
- 寅の日の八日には着物を裁つな
- 鳥居の上に石がのると願いごとがかなう
- 鯰は淀姫さんの使いだから捕るな(川上二帯)
- 縄帯をするもんじやない(墓掘りの時にする)
- 南天を便所の近くに植えると悪夢を見ない
- 鶏の絵をかき荒神さん棚に逆さにはりつけると子供の夜泣きが止まる

- 寝蚊帳起蚊帳（指を折って日を数える時、一日か）人がうわさをすれば耳がかゆくなる
- 五日までは親指から順に寝せ、六日からは起こしていく。この指を寝せて数える日に蚊帳をひく
- 人のまたをくぐるとふとらぬ
- 火吹きびんぶゆー（貧乏）
- 病人は二階へ寝せると下りなければ治らない
- ひわの木は病人の呻き声を聞いてふとるから、屋敷に植えるもんじやない
- 仏壇の北向きはよくない
- 仏壇とかまどは向き合わすもんじやない
- 浮立の夢は悪夢。その時は天井花を見れば禍をまぬかれる
- へそのゴマをとると腹が痛くなる
- 便所は鬼門ずみに作つたらいかん
- 蛇を半殺しにすると祟る
- 蛇を助けると果報がある
- 猫は三年飼つても三日で恩を忘れる
- 猫を殺すと十三年祟る
- 鼠は大黒さんの使い。足で追うといたずらをして返す
- 箸から箸に食物を受取るもんじやない
- はぜの木をかみついてから登るとはぜまけをせぬ
- 梁の下に寝るとおさわられる（悪夢で苦しむ）
- 晩に爪切るもんじやない

- 蛇を指すと指が腐れる
- 蛇のぬげがらでさするとカサがよくなる
- 帚を逆さに立てると客が早く帰る
- 帚を肩にかつくと大きくならぬ
- 星が流れている間に願い事を言えばかなえられる
- 竿に干した物は干した所から取りこめ
- 螢が棟木に止まると病人が出る
- 墓地を北へ広げると死者が続く
- 本を股越えするとおぼえが悪くなる
- みみず小水をまるとみみずばれになる。みみずを清水で洗って土に返せばよくなる。又つばをはいてから小便をまればさわりがいい
- みようがを食べると物覚えが悪くなる（釈尊の弟に茗荷という頭の鈍者がいたとか……）
- めんどりがうたうと家に女が禍する
- 飯が焦げる時釜の上でしゃもじを三回まわせば、においを客にさとられぬ
- 野狐に出合った時は眉につばをつけると野狐は寄りつかぬ
- 指の爪ぎわの逆むけする人は親不幸者
- 湯をぬべる時、水を先にし湯をあとに入れるもんじやない（死体を洗う時は水を先にする）
- 夜口笛を吹けば泥棒が寄ってくる
- 夜鶏のなきまねをすると夜盲症になる
- 夜天井から蜘蛛がさがっていると福がある。（夜こぶし喜ぶとか）
- 夜は回り荒神さんが屋敷内を回っているから、屋敷内に小便をしてはいけない